

徳川本『住吉物語絵巻』考 (上)

— 画中詞の翻刻 —

伊藤学人

尾張徳川家所蔵の『住吉物語絵巻』(以下、徳川本と呼ぶ)は、室町末期の成立と推定される上下二巻の小絵である。本絵巻の大きな特色は、二七段のすべての画面中に、登場人物の会話や心中思惟の詞(以下、画中詞と呼ぶ)が多量に書き込まれている点にある。詞書(本文)はすでに磯部貞子氏によって翻刻されているが、^(注)同氏は画中詞を単なる後世の書き入れと判断されたため、これを翻刻も考察もされていない。しかし、徳川本の画面を仔細に検討すると、絵と画中詞とが相互に関連して成立したとみられる部分も少なくないので、本絵巻の性格を論じる上に画中詞の考察は不可欠である。そこで、画中詞の分析・考察を通して、徳川本の本質を明らかにしたいと考えるのであるが、今回はその資料として、画中詞の全文を翻刻した。これについての考察は次回に譲る。

凡 例

翻刻にあたっては、できる限り原本に忠実であるよう努めたが、細部にわたっては左記の方針に従った。

(1) 画中詞は原本に付されている番号の順に翻刻した。番号の付されていない画中詞は、画面右方から順に翻刻し、便宜上 a b c …… の記号を付した。両者が混在している場合は、番号の付されているものを先に掲げた。

(2) 人物名が明記されている画面もあるが、画中詞との対応が不明確

な場合も少なくないので、特に注記しなかった。

(3) 判読不能の場合は□で示し、その右に推測される読みを記した。ある程度字形が推定できる場合は□の中に入れた。

(4) 読解の便を慮り、私に句読点を付した。

* * *

絵 第一 段

一 いかにかさひしきことのみ候らん、おしはかられて。いふせからぬほとにまいりて□^(あ)まいらせたく候へとも、いつと□^(な)く心のひまもなき事のみ□^(お)て、思ひなからにて候。

二 かやうに心くるしきけしきにて、つくく〜とあかしくらすせおはしまし候へは、みまいらせ候ても心ほそく候。とくしていれまいらさせおはしまし候へ。いらせおはします、ひかすつもり候へは、ことのほかにくつおれさせおはしまし候ほとに、御心もとなくて候。

三 けふな御かへりありそかし。たま〜いらせおはしまして、とく御かへりあるかなしき。

四 と〜めまいらせおはします、あら〜御ことはりや。いまちとわたらせおはしまし候へく候。

絵 第二 段

一いらせおはしまさぬおりはいかゝありつらん。しはしも此御かたへまゐり候はねは、つれゝなる心ちしていそかるゝ、おかしさよ。

二みなくゝいらせおはしまさぬおりは心ほそき心地して候。三てうとaとし月すみなれしかたなれは何となくおもひいて候。三てうとのゝいかにあはれてんすらんなう。

bいつれもとりにうつくしき御すかたのみえさせおはしまさふらへとも、この御かたのうへはたれもわたらせたまはぬそや。

絵 第三段

一あの文、かのしゐのせうしやう殿の、この文まいらせてかならず御返事とりてまゐり候へと、わりなくせめさせおはしまし候程に、さりかたくもちてまゐりて候。

二まつ御うちまゐりのことをこそ一すちにおほしめしたて、さやうの文をはありとてもかひあらしとおもふ。

又一おもひかけぬ人の、これみせまいらせよといふことにて候。御らんさせおはしまし候へ。いかゝ申候へき。

又二みすともはからはれよ。

絵 第四段

一なうゝこれはよく給候。このほども少将殿へはせめさせおはします、返しも候はぬほとに心くるしく候て。この御かたにあまたわたらせおはしまし候とうけ給候ほとに、あはれゝと思ひまいらせ候て候へとも、申なれたる事こそ候へ、さしいてはみて申候はんもひんなく候て、心をつくし候つる。うれしめてたゝ。

二なうきかせ給へよ。いかに申候とも、わらわかひめきみほとにうつ

くしきは、たれもかなはせ給ひ候ましきそよ。その文、たうふくせんはらの一すちにいふことにてもあらはや。はゝもなき人させたまいて候はゝ、大しやうのものよもよきとはおほせあらし。わらはかひめきみもちいたまはめ。少将殿みつれなき御心にてはしめ候しか、もろおやある人をおほせられよかし。

三これは三のきみの□^{うたき}にてこそ候へ。ことさらゆくすへ久しくめてたやゝとおもひて御らんせよ。

四あなかたしけな、ゆゝしのこと候や。この御めをはやかてせうしやう殿にもけさむに入候はん。あらめてたやゝ。

五むくつけゆふ、申におよはず、めてたきことのはしめにあらゝめてた候やゝ。御くわほうさいはひも世中にてたき事を、も、わらはかひめきみ一人もたせ給へ。あなめてたやめてたや、ちくせんとの。

aあなふしきの事ともや。よにはさもおそろしき事はおほき。いたくためしなき事かな。にあひたる人もありけるときゝゝゝありたり。

絵 第五段

一よにけふはさひしきそや。なに事にもあそひ候はや、かきこうをせはや。のとかにてくらさせおはしますほとにつれゝなるそや。

二一日の御このねたをまゐり候はや、ねんなかり候しに。三わらはゝ心のおそき程に、こにはおなし事なからまよゝとおほゆる、みおとすことのおゝくて。

aさきの世もあはれなる、さるへきかみほとけの御はうへんにてこそありつらめなと思へは、あやにくなりし心つくしもいかにおか

しとおほしめしつらめ。

絵 第六段

一 此ことのねはいつくそう、たかひかせ給ふそ。おりからやらん、おもしろく心すこくきこゆるそや、にしのたいから。

二 にしのたいにて候。みやはらのひめきみ、おりくことに心をすましてひかせ給ふ。にしのたいの御心すましたる、御いとうしや。

三 そは何ことそや、うつゝなのことや。されはこそ、なにとやらんことのやうふしんなるよの中、いつかやすけなき物にてありけり。いやしき物はかゝることあるとあんしぬたり。

a いつと申なから、こよひの御ことのねは月の宮この人もみゝたてぬへう、おもしろくきこえさせおほしまし候。むしのねさへもよほしかほにこそのかきりをつくしたるものかな。

b ねられぬをのみともとおほゆるほとに、心のすむまゝに人のきゝとかめんこともわすれて。めさめたる人もやあるらん、わひしや。

絵 第七段

a 夜るはゆきのたまることにてありける。所々おもひやられて、かいのしらねいかなるらんとゆかしき。

b 四きにしたかひていつれかをろかななりともおほえねとも、ざりとではかみな月のそらのくもりかたきかせんかたなくおほゆ。雪はかやうにふかくつもりたるこそおもしろけれ。ひとへなるゆきのかすみたるはしほなきこゝちするそや。

c いつれをむめとわきかたきこすゑともかな。とひこん人もおほえぬに、たそや。

d させてもふしきのゆめをみつる物かな、あさましくて。

絵 第八段

a 日のくるゝなこりおしさよ。野をなつかしみ一夜ねぬへき所のさまかな。

b おそろしや、まつなより人のみける。

c たそやと思ひたれば、せうしやう殿にてありけり。しらぬ人よりもわひしや。いかにみたまひつらん、はつかしさよ。

d あなもおもしろの松のさまや。こゝにて目をくらさはや。

e くるゝをいそかせおはします。なこりおしや、かなしやく。

f されはこそ、申なるはひめきみとおほゆる心にや。たゝあそこへはひよらはや。ひたそらましろみとおもひきりて。

絵 第九段

一 ふしきなりけるひころのしき、なか／＼ことのはなくて、いかにして人つてならて申へきとおほえ候つるに、なか／＼しかりつる御さとゐにとちめはてつる心ちし候て、おもふはかりなくてよ。さても御なげきの心くるしくおしはかりまいらせ候て、申候へきたよりもつゝましくてすこし候つる。いかにおほしけん、ものおもふ心の中も思ひしらせ給へかし。

二 よのはかなさもいまさらおとろかるゝ心ちして、あはれに、一すちにまきるゝかたも候はず。よろつおもひしられてこそ候つれ。日ころよりもよのなかつゝましくて候。

三 心をそへてすこしける月日を、いかにおこかましくおほしけん。おなしうきみながらみえきかれ、まいても御はつかしなから、し

のふることもまげられてよ。

又一かねの昔のみにしみてきこゆるはあけ行おとな。いかゞ秋のよなれはもまたよゑなからの心ちするそや。せうしやう殿のいつとなくうかれたゞせ給ひたる、いかにむねいたきかたのあるらん。又二いかにおそろしくそゞめかれんと思ひ候へとも、思ふ程はかくよかれかちなるともおほせられぬけなり。もとより御ぬしはなに心はあらんそ。

a あげかたになるは、いかに、なにとなくものをあんするほとにふけゆくそもおほえて。

絵第一〇段

一さてものにしのたいの御ことをはきかせおはしましたるか。世に申せはまこしからず心うくあさましけれと、又たゞうちこめんもうしろめたくてよ。□⁽¹⁾のはなきのあさましくて申さむとすれはいきもはつむ心ちして候よ。心うへくちおしき、しくゞさめゞ。

二なにことをいかなることをきかせ給ひたるそや。たか申候そ。心おくへきことにてもなし。こうゞとおほせられたらんこそうれしかるへけれ。

三かやうに申せば人のおしはかりもなにとなく、へたたりたる中をはくちすへき人はあしさまにとりなざるへけれとも、いかなるちゞのやしろも御らんせよ。わかこともよりもすくれておはしませかしとのみ、その御ひかりにてこそひめきみたちもあれかしなど思つるに、おもひのほかの事をうけたまはり候へは、世にあるへしとおほえず。あさましくて候。

四されはこそ、そのゆわれをちときゞてより心への。たとへはおも

ひの外なるものゝいりくるなとやうの事にてこそあるらめ。

五かやうなるはなれたるたいにわかき人わたらせ給ひ候はんに、かゝる事のあさましきとおほしめし候かふしきなる。わらはかちたいきゞそめしよりおとろかれぬ。もとよりと思ひまいらせ候。うへのはかせおはしますはうつゞなき事にてある。

六八月よりのことにてありけるを、心うつくしくしてよ。六かくたうのへんたうとかや申候物、けさもねわすれていてゞ行を人のみてよ。

七とかくいふにおよはず。それとてもさきの世のしゆくえんにてこそありつらめ。さりなからまこしからす心のうちにおもふ。

a 物をきくともおもはぬ事かな、いとをしや。なに心もなくわたらせ給ふ人を、なにことふそくにてかゝる事をたくませ給ふらん。b にしのたいの御事か、まかゞしけなる御こはさしのはつれゞきこゆるは。

絵第一一段

一やう、さは、めのうつらゞ御らんせよ。これはそら事かや。たゞの女はうたちのもとへ行らん物はあそこよりいて入をすへきか。よくゞ御らんせよ。あな心う、しくゞさめゞ。

二たゞとかくいふはかりなし。あなふしきやな。よからぬ女はうたちのなかよりしいたしたる事にてこそあるらん。こんこたうたん、ことはなし。

三此ほとも申せばそら事をいふとのみおもはせたまひつるに、よくゞ御らんせよ。御むこなれはいとしくこそ御らんすらめ。ひたそらにあさましきよりほかの事もなし。せめて中のきみのもと

へかゝることいてきたらはや。たつにとらはいかにせんする。よしおはしませかしとおもふ人のかゝるふしきのことかある。わかためこれのためあはれあさましきことかな。なひく人きく心うさはいかにせん。

絵 第一二段

一 いかほとくひまなき事ともありて、みはなちかたき事ともおほけれど、まして申へき事ありて、ちらとまいりて候そや。

二 あらめつらしや。久しくおとつれさせたまでは心もとなく候つるに、なに事かさいける。ときくはあれらさまへもさんしたく候へとも、こしかさらにかうこにもさうぬほとに、おもひなからずこしさう。

三 そも りてひとりのみすみ給へはいたはしくて、ひんきよき事申さんとたつねつるに、あれのみやはらのひめきみあまりにもてあつかはせ給ふか心くるしき。いかやうならん人もとりまいらせよかしとおほせことあるほとに、しらぬ人のうちまかせたらんよりもいつかたのためよくこそあれとおもひて、そはをもあとをもあたゝめさせ給へかしとおもひてよ。わるくはからひて候かや。

四 ようくなにとおほせらるゝそ。みくかよくもきかておほなるそや。いますこしたかくおほせられよ。こよひよきゆめをみつるほとに、なに事のあらんするそとおもひたれば、かゝることをきくうれしさよ。このほとひとりのみぬれば、いとみもかゆく、こかさのおほくたえかたきにも、てのおよふところこそかけ、すつなくたえかたくて、いかなる人もかなとかなしくて、こあま御

せんのことのみ思ひつゝけさうつるに、さていつころさうそ。ちうなこんとのなにとおほせらるゝそ。

絵 第一三段

二 一つくへもおはしませ。あまりに心うき事のふりわくかなしくこそ候へ。あなたに人のきくらん、そらおそろしや。

三 大かたなへての世のうさも一かたならすあさましくおほゆる心ちして、山かやらにもうちこもるたよりもかなとせきくとおもふ。

又 一やあみきは、がまへてくいつくへ行とも人にしられて、これよりすくにすみよしにゆげよ。大事の事そ。あらおそろしや、人にしらすなよ。

又 二これはなにと申へき、あなたおそろし。下すも上らふもなさぬなかのやうに心うき事もなし。

又 三むかしもいまもなさぬなかはよからぬことゝは申をきて候へ共、これほとにおそろしき事はあらし。あないふはかりな、すへのよきんたちいかゝと、むくいのはとあさましくいとつしきそや。

絵 第一四段

一 なにやらん、このころはものゝみ心ほそくて、よになからふへしともおほえぬ、かなしき。いかなるつゆともきえなは、おほしいつることもこそなう。

二 このほとはよに御しき心くるしく思ひまいらせ候よ。なにとなるへきよのなかやらん、なへてよもいかなるへきやらん、心ほそき事に候。

三よにたれものゝみこゝろほそきこちする、いかなるへきに人のならひは。われも又人もさためあらは、いかてよになからへんとおもひつゝけられて候よ。

五おりからやらん、たゝいまのあらしのをともそらのけしきも心ありておもしろきそや。もみちのちりたるけしきもはかなければ、かせにことよせておもしろきなう。

又一あらふしきのよの中や。さても、いかなるへしともおほえぬ木くさも、めとまる心ちしてあぢきなく、ひめきみの御かたの御心のうち御いとをしやけに。

又二さ候へはこそ、あはれ、けによの中ほと心うき物は候はさりけりと今さら心うくて。

a このほとはひめきみの御かたの、ことのほかに御やせにわたらせおはしますか、御いたはしき。なに、御心のやすからん、あさ夕こゝろくるしき事のみおほしめしなげき給へは。

絵 第一五段 (以下、下巻)

一 たゝそのみくつともなりなはや。よになからへてもなにゝかはせん。

三 あけはなれぬさきに御出候へ。宮のそらもはれしくなり候はぬときおほしたち候へ。道すからこそし月の御物かたり申候はめ。こみやおはしまさはかゝることはあらし。あさましのことや、けに。

a やう、なにどこかあて、こかによるよなかもいはずひしめいてはなきさまたれ給ふそ。物おそろし、六かしやけに。たゝいとましあけてねうとすれば。

b あなあさましや、かゝる事はためしなきことに候。

絵 第一六段

一 きのふのくれに行たるおり、なみたにしつみてありしほとに、あらましことなどのちかくなるを心に思ひむすほほれてかなと、思ひたりしは、はやかゝるへきことを思ひけるこそ心のうちもかわゆくかなしけれ。いつくになにとあるしきにてかあらんす。せん。いかゝせんするそ。

二 なにと心くるしうなげきたまひ候らん。このほとも思ひまうけぬことにてまなし、ふしんまてもなきことかな。一日もめのうつらゝいて、ゆきしうしろすかたをば御らんしつるは。かよひありけは人めもむつかし。こゝろやすくてあらんと思ひてこそ。

三 あなうたて、かゝることをのみおほせあるかほいなき。何ともあれかともあれ、かなしやなう。

四 此ほとまた、物のみ思ひむすほれたる御けしきにてわたらせ給ひつるに、かゝることをのみあんしわつらはせ給ふことにてこそ候つらめ。あはれ、うらめしかりけるよの中かな。

絵 第一七段

一 おもしろの御ことのねや。あはれ、むかしこそ思ひいてまいらせけれ。

二 けに、いかに殿うへなとおほしめしなげくらん。北のかたしおうせたるとうれしかるらん。

三 たゝとにかくにわかみひとつのためなるうきよこそいはんかたなけれ。

絵 第一八段

一これいかにせんする。されはつかひをはいつちへもとめうしないけるぞ。たれいつくにてもおひてもとめよや。

二これにわたらせ給ひしほとも、ひめきみたちにつゆおとりて思ひまいらせ候することになかりしを、人の心のふかさは、なごぬ事はとよかくよといふなをたてられまいらせ候て、かく行ふなきこととわからはかとかになりけるか、いつくにもなからへてたにもをはしませは、心やすきことよ。

三しもをきはてぬるもとゆいもおしからず。このきみの行ふをもみを行てみはやきかはや。これほとにやすきそらなくなくをも、おやのおもふほとはおもはねはこそふかくいまゝていつくにあるといふことをきかせざるらめ。

四いまゝていのちなからへて、二たひ物を思ふ事のうらめしさよ。いまはいつくになにとありといふことをせめてしりたらは、これほとにあさ夕物はおもはし物を。

又一いたはしの御ことや、御しよにもたへさせをします。あまりに御いたはしき。ひめきみの御ためも御つみふかき心ちして、たゝ何事も人の御ゆくゑか御いたはしきみよ。

又二御所にもたへこかれさせをしますも御ことはりにて、御いとうしき。あなたにも御心つよきやうなれとも、それも御ことはりと思ひまいらせ候する事がある。

又三御みさまも御心つきも、さもつつしくわたらせおはしましし物を、いつくになにとしてかわたらせをしますすらんよと御恋しき。たゝあまりにかなしきおりは、にしのたいへまいりてこそ

うさもつらさも、なくさむ心ちのしつる物を。

絵 第一九段

一いかにわらんへ、このあたりにみやこのひとのすむ所やしりたる、をしへよ。

二あのすみのえ殿にこそ宮このあま君とてすみ給ふ。此ほとうつくしきしらうたちのわたり候し。けふまつのはをかくとて、のそいでこそみたりつれ。

三あらよく申たり、いしく申たり、なをくよく申せ。

絵 第二〇段

一あはれ、物はかなき世にもふるかな。思ひのほかなるすまゐにて、けふまであかしくらす事のふしきさよ。たゝいまの心ちせしかとも、月日のつもるほとなさよ。みやこになにことかあるらん。

二みやこにてかゝる所はめなれぬことにてよ。やうかはりてこれほとにおもしろく候よ。上とめまいらせ候へきあたりもなし。たゝうちとけてかたゝあそはせおはしまし候へ。

三みをなきくさになしはてゝさそふ水あらはとこそ思ふに、いま一たひかはらぬすかたをもみせ、見まいらせはやとこそおもへ。おしからぬみなからきみいまゝてなからへける、しるしもあれば。

四されはとてかくすませ給ふへきにてもなし。おのつから月日のかさならんにまかせは、かみ仏の御はからひなれは御めくみもあらんすらんとおほしめして、なに事もあはれくとおほしめしてよ。

五たれまつかせのたえすふくらん。

六ともかくもさらはみをなきものになしてこそ候はんすらめ。

a まきるへうもなきしうか声にこそきけ。いかにいはきむすへる人なりとも、これまではかなくたつねきつる心さしをはざりとも思ひしらぬひとはあらし。さきの世いかなりけるちきりにてこの人に心をつくしそめけん。

一 あらふしきや、なにとてこれまでおほしめしたちけるぞ。いつくへの御つるにて候けるぞ。ゆめのこちしてこそ候へ。思ひのほかなる世に忍かねさふらひて、これまでさすらへてこそ候へ。ひめきみもよを一糸にうきものにおほしめし、はけましおはしまし、わらはにさへ御ゆくゑをもしらせおはしまし候はてとよ。

二 あな心うのことをおほせらるゝ御物かな。このほとこの心のうちをはいつくをなにと申候はん。世になからへてあるへき心ちもせざりしか共、かみの御しるへをたのみてこそ思ひたしより、この宮この空もみるへきことゝもおもはざりしかとも、くわんをんの御はからひにこそこれまでもたつねまいらせきつるに、いかなりとも山にすむとら大かめもなとあはれとはおもはざるらん、ひめきみこそ何とおほしめさすとも。うたてや。

三 たうしわかき人はみな心ともかつよくさふらうぞ。とにはみよりこれほとになさけきとよ。きまいらせ候かあまりに御いたはしき。まことにいかに御心つくしにて候つらん。こよひはいかさまかくてあかさせおはしまし候へ。ひめきみもこれへわたらせおはしまして候そとよ。

四 いうゝならんよるは此まへにてみくつともをもはざるへしかは、さるへきにてこそあるらめなればちからなし。もとよりみやこそうかれしよりみあるものにしもおもはざりして。

五 あまりに思ひよりまいらせ候はぬことは、心ちのまよふとおほえて、うつゝともおほえ候はぬそや。ふしきや、こよひゆめにみまいらせ候て候つる。あなふしき、ゆめにみたりけるはいかに。六 よしいまはとかく申さし、これほとこの御心のすへをは。

絵 第二一段

一 あなぐるしや、なとわうせはをそかりけるぞ。

二 このめともかあまりにいしけにておほくとるとて。

a あらこのかせはつよくふきく候ほとに、御舟ははやかうゝすへう。

b このほとすみのへとのいらせたりつる人からう、いみしくなにはかひつまうかよう。

c 久しくみざりつるきやうをみんすることよ。あまりにひとかおほくて、あのをうともかけしき御らんせよ。

絵 第二二段

一 よに神はいまた御らんしはなさせおはしまさぬ。おなしみなから、又たちかへらんところ此ほとは思はざりけれ。

二 なにとやらん、たゆめをみる心ちして。

三 いかにけに御くたひれありつらん、御いたはしや。

又 一 なを心ちもしつまり候はぬやうにおほえ候つれとも、けふになりてそ又ありきたる心ちするそや。

又 二 ふねのうちのあはれおもしろかりしものを、上にはよくも御らんさせおはしまさずやと思ひまいらせ候か心にかゝりて。われらははしにてのこりなくいつくもみえて候よ。

又三わらはゝめかまひしほとにたゝねてのみ、なに事もみ候はてよ。

絵 第二三段

一 たいのひめきみの御ゆくゑしる人の申候しは、思ひかけすひんかし山のかたに、ふしきなるほうしのもとにおはしまし候と申。あなふしき、いまゝしひのさほうやおもへは、まめやかにあさましく心うき。

二 たか申けるぞ、その人にたつねはや。いつくのほといかなる所にてかあるらん。

三 それほかか申せし。そらいつそやのあまきみから、又さきの月にまいり給ひたりし人から、わすれて候よ。御行ゑもみもきかれまいらせ給ひ候はぬかふしきなるそとよ。わか御おやよりもほうしなりとも行々とわかゝしけなれば、まさりとこそおもはせ給ふらめ。

四 ぬしをわするゝ事はなにとてあらんするぞ。さるにてもたれかひいつらん。

五 もとこれへときゝかよひしほうしにてはなくて、それよりちとわかきかあさましきものゝもとにといひしな。

六 きけはゝたゝあさましく心うく候とよ。六かくたうにしはしわたらせ給ひけるか。そこをいまのほうしとつれてうせさせ給ひて、ひんかし山に御わたりあると申候しか、くわしくしりたる人のまいれかし、とはん。

a あらおそろしの人のかほやくちや。あれやうなる人の行ゑいか、あらん、いまよりおそろしきそや。あたにはあるましきと心のうちと思ふ。

絵 第二四段

一 けにかゝる御こともみまいらせ候するにつけてもたゝあはれとて、おうち御所にみせまいらせはよと思まいらせ候て。いかに御としよらせおはしましたらん。おなしみやこのうちながら、かくて月日のつもあるもいとゝおほしわくらんと思ふもかなしき。二 ゆめにもかゝるさしきをもしりまいらせ候おはしまさぬ事にてこそあらぬなう。

三 それをのみこそこの御かたにはなげかせおはしませとも、しはしゝゝとのみめの御かたに申おはしますすとに、こかありこそ候はんすらめと思ひてたゝ。

a あな御いたいけや、たゝそゝろにいたきまいらせ候たきそかし。

b 此ほとゝなりて御さかしくいらせおはしましたる。

c なう、これこそうつくしきつみ候よ。あらいとをしの御はやうや。あまりに御そゝかはしくて御ちもまいらぬことよ。

d あそこへすゝめのこのちいさきかとひつる、とりてたへ、やうゝ。

e あなあふな、たゝなにと申こともなくはしらせおはしますことよ。とくゝこゝへいらせおはしませや。

一 なに事やらん、うちよりめさるゝほとに、けふは物くさくていれひのきあれとも、そとまいりてうけ給り候て、やかていて候はんぞや。

二 とく御いて候へ。さりなからいかにいそかぬ事にてあらんすらん、女はうたちの御なかにて。

絵 第二五段

一 めでたき事のなかにいかやうの事候はん、しんしやくせられ候つる。いかにおもひまいらせ候へとも、きんたちの御けしきはたゝゆくゑなくみし人のおもかけなる心ちして、もよほされ候そや。ことにこのひめきみの、さなからうつしとりたる御面かけにて候ほとに、しのひかねられ候そや。さらてたにもろきおひのなみたにて候。

二 ことさらにちと思ふやう候て申候つる。もろきこともまめやかに御ことほりと思まいらせ候て候物を。つねにけさんに入て候へとも、なにとやらんしゆつしなどには心のひまもなく候て、いまよりはさひくくけさんに入候は、税入候へく候。

a 昨日は一日御くしことにけいくわいして候つる。はうしやうゑのことに、あなたこなたよりひきよなによとせめつけられて候つるに、もつてのほかにくたひれて。

b 久しくさんくわい申さて候つるに、御つゐてなから御うれしくこそ候へ。

c きんりへのしゆつしならてはこれにもさし出ることも候はぬほとに、つれくにおほえ候。時々は御入候て御きをもなくさめおはしまし候へ。

d そのことに候。このほとちとしやうのことにて、ちときつそくつかまつり候へは、大将しきりにめされ候ほとに、おさへていて候。

e とし月の御なけきにやらん、ことのほか御としのよりたる物かな。あはれなる事ともかな。いかにわれらもとしよりたるらん。

絵 第二六段

一 たとひかくきみは御心つよくてやみなんとおもはせ給ひ候とも、なとやいかなるふしきのあるほとに、かうくの事こそありつれはいかゝせんともそこにはしらせられさけるに、此ほともこの事はさしをきて、そこをのみこそうらみつれ。

二 うとましく候しありさまは、けにけふまでかくも心ふかきやうにおほしめし候ぬへく候しかとも、あたなるよのをしはかりにても候はくこそ、かくとまてもなをいかなることのいてき候はんすらんとおそろしくて、いまに候つる。

三 いつくをはしめて申へしともおほえぬとし月のしき、御ことほりなから、又よには、かられて心つよくしたるやうに候。

四 めんくその日より心もとなき事にて候しかとも、あまりにおそろしく候しほとに、それにしんしやくして候つる。

五 くらきほとにみまいらせ候せしより、なを御としかよりたるそや。

一 この目ころおほやけわたくしなけかせおはしましつるに、けふはゆくくとおほしめす、御いとをしや。

二 あらおそろしや、たゞまことならぬ事のやうにうとましましものはあらし。

絵 第二七段

一 うちへまいられたる女御の御かたになにことかある、御ことつてはなきか。

二 女の御かたにこゑわたしとおはしまして、御ことなとひきて御あ

そひありしほとに、おそくいてゝ候。ちか比おもしろくこそ侍しか。

a ちときゝまいらせ候はゝや、いかゝおほしめす、わらはゝなにも御ゆかしき。

b わらはもきゝまいらせ候はや、あちきなや。

c ことをならひたれば、てかなにともいたくて、ちとまつあそひ候はんそや。

d さこそ、まつちと御あそひありてのちにひかせおはしませ。

*

(注) 『住吉物語』(古典文庫第六九冊、昭和二八年)。『尾州徳川家本住吉物語とその研究』(笠間書院、昭和五〇年)。

——広島大学大学院博士課程後期在学——